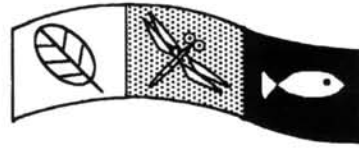
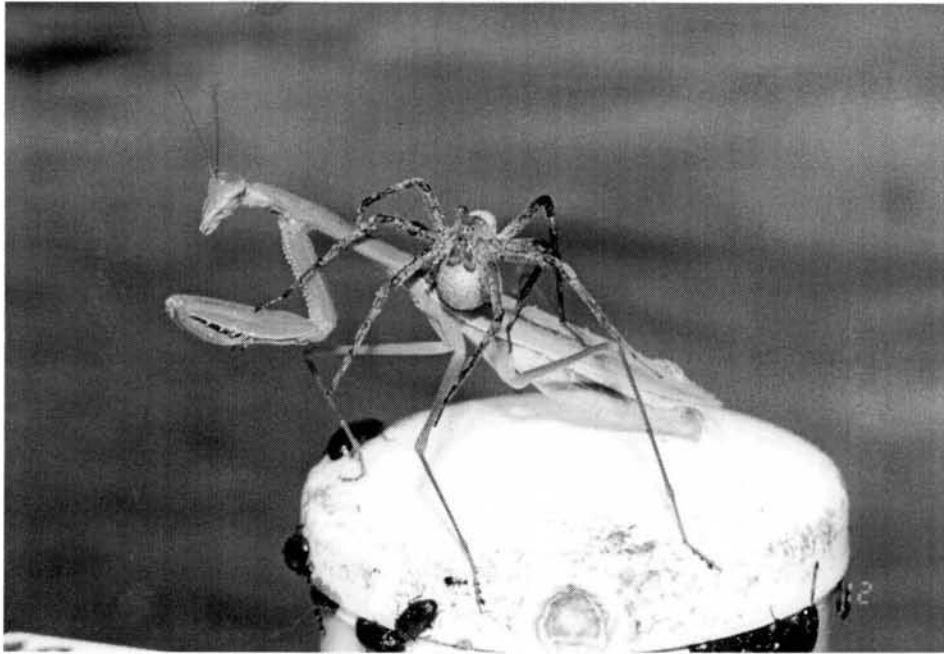


Rio



リオ ～豊田市矢作川研究所 月報～ No. 29



道路まで浸水し、歩道の手すりに避難した虫達。西広瀬町の矢作川沿いにて。
(2000年9月12日 梅村 金享二氏 撮影)

100年に1回?の大洪水

2000年9月11～12日の大雨で矢作川上流では総雨量600mmを記録しました。豊田市内でも保見で462mm、大畑で488mmの大雨でした。矢作川研究所では洪水直後の矢作川の様子を写真に収めました。

た。また多くの方々から矢作川各地の状況について情報が寄せられました。それらの中から生々しい川の姿を紹介します。

●西広瀬町では豊田明知線(県道11号)沿いの川



平常時の広瀬ヤナ(1997.7.23)



洪水後の広瀬ヤナ(2000.9.14)

と山にはさまれた家が床上浸水していました。つまり豊田明知線もかなり水没したようです。広瀬ヤナは基礎を残して流失していました。

「広瀬ヤナ」と大きく書かれた屋根の上まで砂が乗っていました。(2000.9.14 愛知工業大学：内田臣一氏)

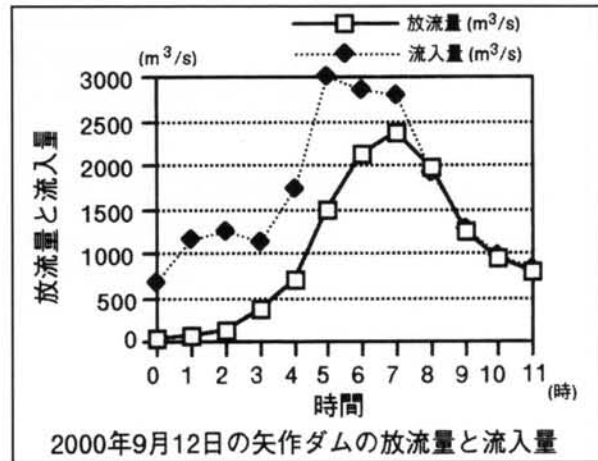
●先日のメールで矢作川の中流域（旧築場）の水位は、過去最大級と報告しました。まだ、濁水で増水が続いていますが、平水位をもとに測定した結果、7.7m高であったことが分かりました。測定場所は、犬伏橋の橋げたです。洪水後1週間経過しましたが、まだ濁りがとれません。最低1か月はかかると思います。これでは今年の秋から始まる仔魚調査や海の調査が気になります。(2000.9.18 天然アユ調査会 梅村金亨二氏)



中央部分が流された富国橋。支川の犬伏川が合流する少し上流にかかる橋で、川沿いの民家は床上浸水の被害にあった。(2000.9.22)

●12日当日、豊田大橋から矢作ダムまでの区間を調査に出かけました。古岸水辺公園は駐車場まで完全に水没し（先週、研究所の田中と水辺公園愛護会のメンバーに聞き取りを行ったところ、現在の水辺公園付近は戦後しばらくまで完全に川の入り江状になっていたという話を聞いたのですが、その話をほうふつとさせました）、左岸の堤防に近い建物は床上浸水していたとのことでした。

籠川合流点、波岩水辺公園は完全に水没していました。越戸ダム直下では、コンクリート護岸の一部が破損していました。特に驚いたのは、上流部の旭町でも堤防ぎりぎりまで川幅が広がり（100m以上?）、岡崎市以南の下流のような景観となっていたことでした。舗装路随所、小渡ヤナとその対岸の近自然公園、カヌーの発着場のある池嶋も破壊されていました。この付近で更に驚いたのは、大增水してまだ雨も降っているのに、大きな網を持って川の中をうろついているおじさんがいたことでした。土砂崩れであちこちが寸断された豊田明知線を迂回しつつ、16:00 p.m.頃何とか矢作ダ



矢作新報（2000.9.22号）掲載のデータより作成

ムまで辿り着きました。生木の山が道や湖面の方々にできていて、車を降りるといい香りが鼻をつきました。道にできた水たまりの中をサワガニが歩いていました。

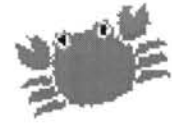
陸上植物を担当する立場からの印象としては、矢作川の河辺に多いマダケ林は、高度経済成長期以降、竹稈を利用する機会がなくなってから程の密度が高くなりすぎ、河畔植生の生物多様性に悪影響を及ぼしているが、そもそもの水害防備林の役割はかなりきちんと果たしているようだ、ということでした。それから、冠水してもしっかり直立している樹種と倒れてしまった樹種（樹齢も関係あるかも?）があるようでした。また、宮田事務局次長から、堤防に緑被のある所はない所に比べ、はっきりと護岸の効果があつたこと、河畔林は洪水流速を弱め堤防への衝撃をやわらげていたということを知りました。それから、旭町森林組合の参事さんにお電話して今回の被害をお聞きしたところ、町内の林地は所々斜面の崩壊はあるものの、さほど大規模ではないということでした（すでに管理されていない針葉樹植林地が大半であるにも関わらず）。(2000.9.17 矢作川研究所 洲崎燈子)



流木に湖面を埋め尽くされた矢作ダム (2000.9.12)



矢作川観察ノート



—⑦ハチ追いの男に逢った日—

新見 幾男

9月24日午後、矢作川の堤防で、私はハチを追う男に逢った。

「へぼ獲りかね」と聞くと、「いや、私の目で小さなへぼを追うのは難儀だからね。きょうはクマです」と言う。へぼは小型のクロスズメバチのことであり、クマはクマンバチ、つまり大型のオオスズメバチのことだ。へぼやクマは当地方で使われる俗称である。

男はコオロギの入った箱を車から取り出し、長い竹串の先に4匹のコオロギを生きたまま刺した。ほどなくクマが飛来し、コオロギの肉をかじり取り、足と口でダンゴ状に丸めはじめた。それを自分の巣に持ち帰ろうとしているのだ。

男は長さ5cmほどのビニールひもを、クマの腰のくびれあたりに、そっと付けようとした。ひもの先がワッカになっているようだ。男は器用なしぐさで、すばやく装着し終えた。クマは攻撃性の強い猛毒を持ったハチだが、エサを獲っている時は、人がさわっても刺さないのだそう。

クマはダンゴをかかえ、黄色の目印のビニールひもをひらひらさせながら、矢作川の下流方向へ飛び去った。その飛行方向を、男は双眼鏡で確認していた。

また別のクマが飛来し、男はビニールひもを装着した。私も大胆に近接し、クマがコオロギをかじる姿をカメラでのぞいた。風があったせいか、ハチの毒に弱い体質の私が怖がったせいか、クマのいかつい顔がこちらを向いている写真は撮れなかった。

男は2匹目のクマが巣に帰るのを追って消えてしまい、もう戻ってこなかった。巣のありかの見当がついたのだろう。秋の深まるころに地中から巣を掘り出し、巣の中にびっしり詰まった幼虫を人が食べてしまうのである。

この写真は、コオロギをかじるクマンバチの腰のくびれに、男が目印のビニールひもを装着しているところだ。クマは毒針のある尾の方をこちらに向けているので、顔はコオロギの向こう側にかくれて見えない。

ここは河口からちょうど30kmの位置の、矢作川左岸堤防の街側の斜面。岡崎市北部である。男は堤防を背に、東を向いている。真ん前に「マルサンみそ」の工場がある。私は上流方向を向いてシャッターを押した。

この堤防斜面の草刈り跡には、何やらネジバナに似た淡いピンク色の花が一面に咲いていた。ツルボというユリ科の在来植物だそう。リオは白黒の程度の良くない簡易印刷だから、花は白っぽくぼやけた面にしか見えないだろう。その中に黒っぽく識別できる花が見つければ、それは彼岸花。早くカラー印刷にしたい！)

その緑の草地の中のピンクの花園には、秋の乾いた川風が吹いていた。花々に野生のミツバチなどの小型昆虫が群がり、それを捕食するために大型肉食昆虫のクマンバチが飛来する。そんな狩場の風景に「超大型野生生物」のハチ追いの男が闖入したのである。

この日、私は岡崎市から岐阜県上矢作町までの矢作川を見て廻る予定だったが、堤防の花園でクマンバチを追う男に逢い、仕事をする気分も時間も失った。

去る9月12日の大洪水に洗われ、30km地点の矢作川下流部一帯は、白い砂地が支配する清潔感のある世界に変わっていた。前日の雨で川はやや増水し、濁流が続いていたので、河床がどう変化したかはわからなかった。

90km地点の上矢作町に着いたのは夕刻だった。赤茶色だった上村川の濁流は少しおさまり、黄土色になっていた。根羽川は明るい灰色になり、名倉川は洪水前の水質に近づいていた。この三大支流が合流して矢作川になるのだが、集中豪雨から12日目のこの日、そこはまだ黄土色に支配されていた。今回の矢作川汚濁は長期化しそうな様相だった。

(にいみ いくお、矢作川漁業協同組合 専務理事・豊田市矢作川研究所 事務局長)



クマンバチの狩場の花園に闖入した「超大型野生生物」のハチ追いの男。ここでは人も生態系の一構成要素的存在だ。

